両親を事故で亡くし、生きる気力をなくしていた青山霜介。
ある日、バイトで向かった水墨画の展覧会場で、一人の老人と出会う―。

この書影画像はＢＯＯＫデータＡＳＰから引用しています

「わたしはこの若者を弟子にしようと思うんだ」

老人の正体は、日本を代表する水墨画の大家、篠田湖山だった。
それに反対する湖山の孫、千瑛（ちあき）と、湖山賞をかけてなぜか勝負することになった霜介。

「心の内側に宇宙はないのか？」

「でもね、いいかい、青山君。水墨画は孤独な絵画ではない。

水墨画は自然に心を重ねていく絵画だ」

「君は善い目と心を持っている。それが何物にも代えがたい財産だ」

水墨を描くことは自分の内面と向かい合い、外との繋がりを感じること―。
師や身近な人々と交わり、ひたすら描き続ける中で、少しずつ回復していく霜介。
そして、千瑛との勝負の行方は…？

線は、僕を描く

砥上裕將／著　2019.7　講談社